



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	聴取者にとっての演奏表現の芸術性 : テンポのゆらぎに焦点を当てて
Author(s)	張, 旭穎
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第16981号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16981
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99825
Type	doctoral thesis
File Information	Xuying_Zhang_summary.pdf, 全文の要約



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名：張 旭穎

学位論文題名

聴取者にとっての演奏表現の芸術性：
テンポのゆらぎに焦点を当てて

本論文の観点と方法

「芸術的演奏」とは何を意味するのか。この問いは、演奏科学および音楽心理学において繰り返し議論されてきた。しかし、演奏者の立場から語られる芸術性と、聴取者が知覚する芸術性とが必ずしも一致するとは限らない。とりわけ、演奏における全体的テンポの変化や部分的テンポのゆらぎといった時間的操作が、聴取者にどのように解釈され、芸術性判断にどのように反映されるのかについては、体系的な検証がまだ十分とは言えない。

本研究は、聴取者の視点に立ち、演奏表現における時間的操作が芸術性評価に及ぼす影響を実験的に検討することを目的とする。楽曲構造や和声進行の影響を最小化するため、音階およびアルペジオからなる単純な旋律を刺激として用い、全体的テンポ、部分的テンポの操作位置、および操作範囲を体系的に操作した。さらに、長調・短調・無調という調性条件を設定し、音楽訓練年数に基づく群比較を行うことで、芸術性判断の形成要因を多面的に検討した。また、「好み」「表情づけ」「上手さ」といった他の主観的印象との関連性も分析した。

本論文の内容

第1章では、演奏を作曲—演奏—聴取のコミュニケーション過程として捉える理論的枠組みに基づき、時間的操作が聴取者の知覚に及ぼす影響を先行研究から整理した。また、芸術性評価が複数の印象次元と関連する可能性、および音楽経験が評価に及ぼす影響について検討し、本研究のリサーチクエスションと意義を提示した。

第2章では、長調の音階やアルペジオを用いた予備実験を通じて、音階およびアルペジオという単純旋律を用いた場合でも、テンポ操作に応じて芸術性評価が変化することを確認した。また、刺激の音符数が評価に与える影響を検討し、本実験で使用する音数条件の妥当性を検証した。これにより、単純旋律であっても芸術性判断の実験的検証が可能であることが示された。

第3章では、30音の長調刺激を用いて、全体的テンポおよび部分的テンポの操作が芸術性評価に与える影響を検討した。その結果、音階・アルペジオのいずれにおいても、全体的テンポの主効果が認められ、低速条件が一貫して最も高く評価された。部分的テ

ンポの操作位置では、とくに曲の終わりでのテンポのゆらぎが高く評価される傾向が見られた。さらに、操作範囲については、4拍条件が最も高く、次いで3拍、2拍の順で評価が低下した。これらの結果は、部分的テンポのゆらぎであっても、一定の持続時間を伴い、構造的終結点と結びつく場合に、表現的意図として知覚されやすいことを示している。音楽訓練の影響については、各群で傾向の違いはみられたものの、統合分析では有意な主効果は認められず、芸術性評価は主として時間的要因に基づいて形成されることが示された。

第4章では、短調刺激を用いて同様の分析を行った。全体的テンポの効果は長調と同様に認められ、低速条件が最も高い評価を得た。部分的テンポの操作位置では、曲の終わりにおける操作が他の位置より高く評価された。操作範囲の効果も一貫して確認され、広い時間範囲にわたるテンポ変化が芸術性評価を高める傾向が示された。長調と短調の結果を比較すると、時間的要因の効果は概ね一致しており、芸術性判断において時間構造が主要な手がかりとして機能していることが示唆された。また、長調と同様に、音楽訓練を要因とした分析では有意な主効果は認められず、短調条件においても芸術性判断は音楽訓練より時間的特徴に強く依存することが示唆された。

第5章では、無調刺激を用いて、音楽訓練の影響を含めて検討した。まず群内の分析では、音階刺激においては操作範囲のみが初心者および中級者群で有意となるなど、効果の現れ方にばらつきが見られた。一方、アルペジオ刺激では、全参加者群において部分的テンポの操作位置の主効果が認められ、とくに曲の終わりでの操作が高く評価された。また、中央値との比較では、初心者および中級者群では多くの条件で評定値が中央値を上回ったのに対し、上級者群では評定が中央値付近に集中する傾向が見られた。統合分析では、音楽訓練の主効果は認められず、芸術性評価は主として時間的要因および音型によって規定されていた。

第6章では、長調・短調・無調の三条件を統合し、調性感の効果を検証した。その結果、音階およびアルペジオのいずれにおいても調性の主効果は認められず、調性を含む交互作用も有意ではなかった。一方、全体的テンポ、部分的テンポの操作位置や操作範囲といった時間的要因は、調性条件を超えて一貫した主効果を示した。低速テンポ、曲の終わりでのテンポ変化、広い操作範囲が高い芸術性評価と関連することが明らかとなり、芸術性判断が音高体系よりも時間的構造に強く依存していることが示された。

第7章では、芸術性と他の印象評価との関係を検討した。音階・アルペジオのいずれにおいても、芸術性は「好み」および「表情づけ」と非常に高い正の相関を示し、単回帰分析においても高い説明力が確認された。一方、「上手さ」との相関は中程度にとどまり、芸術性評価が技術的完成度とは必ずしも一致しないことが示された。また、調性は好みおよび表情づけには影響を及ぼす場合があったが、芸術性そのものには明確な効果を示さなかった。芸術性は好感度や表現的豊かさと強く関連しつつも、それらに完全に還元されない独自の評価次元として機能している可能性が示唆された。

第8章では、以上の結果を総合し、本研究の意義および限界を整理した。単純な旋律を用いた実験的枠組みによって、芸術性評価が全体的テンポおよび部分的テンポの操作によって体系的に変化することを示した点に意義がある。また、調性や音楽訓練は芸術性評価に体系的な影響を示さなかった。さらに今後の発展として、本研究で用いた単旋律・チェロ音源という限定的な刺激条件を拡張し、多声的楽曲や他楽器音色を含む刺激での再検証が求められる。また、タイミングやダイナミクス、アーティキュレーションなど他の表現要因との相互作用を検討する必要もある。「芸術性」概念の理論的整理を進め、他の印象評価との関係構造をより明確にすることも今後の課題である。